



日米

THE JAPANESE AMERICAN
PUBLISHED DAILY AT
650 ELLIS STREET
SAN FRANCISCO, CALIFORNIA
PHONE PROSPECT 238

回顧
大勇猛心
年頭の言葉

「時」は大河の流るが如く、
人生の道は、一瞬の間に
過ぎ去る。...

新春痴語
春舟

春の一月は、陽春のやまふ
春の二月は、陽春のやまふ
春の三月は、陽春のやまふ

あら玉

あまの玉の如きれば野路の
はては、草花の如きれば
はては、草花の如きれば

人格主義宗教
多賀義仁

我々日本人は、思想を統一して
宗教を創出し、人格主義の
宗教を創出し、人格主義の

日系市民の日本
見学の擧を喜ぶ

リビングストンの日本人は
すつかり米国人生活に適合
ロバート・エ・パーク博士



風東初 題五年新

優秀同胞第二世
在任同胞は此難局に堪へ

泰 庄 吉
在任同胞は此難局に堪へ
在任同胞は此難局に堪へ

日本文明と歐米文明
兩者は相反すること無し

教育による二民族の接近
教育による二民族の接近
教育による二民族の接近

宗教家
宗教家

宗教家
宗教家
宗教家

米州に於ける我々の回顧
米州に於ける我々の回顧
米州に於ける我々の回顧

米州に於ける我々の回顧
米州に於ける我々の回顧
米州に於ける我々の回顧

米州に於ける我々の回顧
米州に於ける我々の回顧
米州に於ける我々の回顧

武藤、山本兩總務 引責辭表を提出す

貴族院改革案龍頭蛇尾の爲

貴族院改革案龍頭蛇尾の爲、武藤、山本兩總務、引責辭表を提出す。貴族院改革案は、龍頭蛇尾の爲、武藤、山本兩總務、引責辭表を提出す。貴族院改革案は、龍頭蛇尾の爲、武藤、山本兩總務、引責辭表を提出す。

研究會公正會狼狽 貴族院改革新案次議會提出

研究會公正會狼狽、貴族院改革新案次議會提出。研究會公正會狼狽、貴族院改革新案次議會提出。研究會公正會狼狽、貴族院改革新案次議會提出。

東京電燈會社の暗闘 越山常務取締役遂に辭職す

東京電燈會社の暗闘、越山常務取締役遂に辭職す。東京電燈會社の暗闘、越山常務取締役遂に辭職す。東京電燈會社の暗闘、越山常務取締役遂に辭職す。

小樽港爆発死者四十名 家屋の焼失數二百名に達す

小樽港爆発死者四十名、家屋の焼失數二百名に達す。小樽港爆発死者四十名、家屋の焼失數二百名に達す。小樽港爆発死者四十名、家屋の焼失數二百名に達す。

本年上半期入超三億餘 義務教育に政友本黨態度

本年上半期入超三億餘、義務教育に政友本黨態度。本年上半期入超三億餘、義務教育に政友本黨態度。本年上半期入超三億餘、義務教育に政友本黨態度。

日本活動社損害賠償訴訟 前田利爲侯慶典は二月七日

日本活動社損害賠償訴訟、前田利爲侯慶典は二月七日。日本活動社損害賠償訴訟、前田利爲侯慶典は二月七日。日本活動社損害賠償訴訟、前田利爲侯慶典は二月七日。

極東關係電報 一月廿一日聯合通信

極東關係電報、一月廿一日聯合通信。極東關係電報、一月廿一日聯合通信。極東關係電報、一月廿一日聯合通信。

外相新聞記者團に 煽動的言論を警む

外相新聞記者團に、煽動的言論を警む。外相新聞記者團に、煽動的言論を警む。外相新聞記者團に、煽動的言論を警む。

日米將校交換案に 米陸相同意を聲明

日米將校交換案に、米陸相同意を聲明。日米將校交換案に、米陸相同意を聲明。日米將校交換案に、米陸相同意を聲明。

華盛頓電報 一月廿一日聯合通信

華盛頓電報、一月廿一日聯合通信。華盛頓電報、一月廿一日聯合通信。華盛頓電報、一月廿一日聯合通信。

青島病院全焼す 焼跡より屍體十三發掘さる

青島病院全焼す、焼跡より屍體十三發掘さる。青島病院全焼す、焼跡より屍體十三發掘さる。青島病院全焼す、焼跡より屍體十三發掘さる。

均衡主義か協調乎 英國大使政治學會にて高唱

均衡主義か協調乎、英國大使政治學會にて高唱。均衡主義か協調乎、英國大使政治學會にて高唱。均衡主義か協調乎、英國大使政治學會にて高唱。

米大陸電報 一月廿一日聯合通信

米大陸電報、一月廿一日聯合通信。米大陸電報、一月廿一日聯合通信。米大陸電報、一月廿一日聯合通信。

廣大なる土地提供説 墨國が日本人移住に對して

廣大なる土地提供説、墨國が日本人移住に對して。廣大なる土地提供説、墨國が日本人移住に對して。廣大なる土地提供説、墨國が日本人移住に對して。

英國領政府 帝國會議案に反對

英國領政府、帝國會議案に反對。英國領政府、帝國會議案に反對。英國領政府、帝國會議案に反對。

南加の候補大躍進 北加候補を一蹴す

南加の候補大躍進、北加候補を一蹴す。南加の候補大躍進、北加候補を一蹴す。南加の候補大躍進、北加候補を一蹴す。

日本訪問見學團員得點表

地方	得點
東京	一七四・七二
大阪	一四七・七〇
名古屋	一四七・七〇
京都	一四七・七〇
福岡	一四七・七〇
札幌	一四七・七〇
仙台	一四七・七〇
青森	一四七・七〇
岩手	一四七・七〇
宮城	一四七・七〇
秋田	一四七・七〇
山形	一四七・七〇
福島	一四七・七〇
茨城	一四七・七〇
栃木	一四七・七〇
群馬	一四七・七〇
埼玉	一四七・七〇
千葉	一四七・七〇
神奈川	一四七・七〇
新潟	一四七・七〇
富山	一四七・七〇
石川	一四七・七〇
福井	一四七・七〇
岐阜	一四七・七〇
愛知	一四七・七〇
三重	一四七・七〇
滋賀	一四七・七〇
京都	一四七・七〇
和歌山	一四七・七〇
奈良	一四七・七〇
大阪	一四七・七〇
兵庫	一四七・七〇
徳島	一四七・七〇
香川	一四七・七〇
岡山	一四七・七〇
広島	一四七・七〇
山口	一四七・七〇
徳島	一四七・七〇
香川	一四七・七〇
岡山	一四七・七〇
広島	一四七・七〇
山口	一四七・七〇

支那人排斥再燃 墨加移民制限法

支那人排斥再燃、墨加移民制限法。支那人排斥再燃、墨加移民制限法。支那人排斥再燃、墨加移民制限法。

世界人口七億 勞農陸相閉談

世界人口七億、勞農陸相閉談。世界人口七億、勞農陸相閉談。世界人口七億、勞農陸相閉談。

米労働者帰国 米労働者帰国

米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。

米労働者帰国 米労働者帰国

米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。

米労働者帰国 米労働者帰国

米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。

和解放政策 獨逸外相聲明

和解放政策、獨逸外相聲明。和解放政策、獨逸外相聲明。和解放政策、獨逸外相聲明。

米労働者帰国 米労働者帰国

米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。米労働者帰国、米労働者帰国。

桑防長旅館

桑防長旅館、桑防長旅館。桑防長旅館、桑防長旅館。桑防長旅館、桑防長旅館。

東洋汽船株式會社

東洋汽船株式會社、東洋汽船株式會社。東洋汽船株式會社、東洋汽船株式會社。

大阪商船出帆廣告

大阪商船出帆廣告、大阪商船出帆廣告。大阪商船出帆廣告、大阪商船出帆廣告。

桑港出帆日

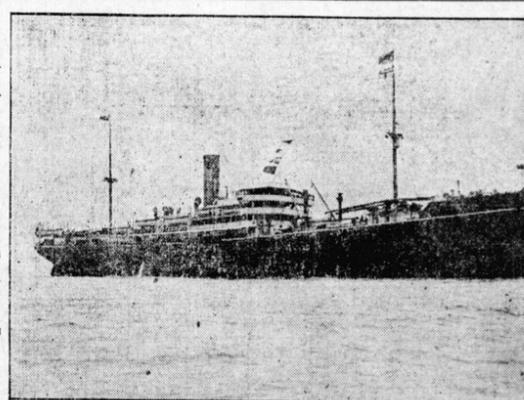
桑港出帆日、桑港出帆日。桑港出帆日、桑港出帆日。

日本銀行

日本銀行、日本銀行。日本銀行、日本銀行。

大正藥房

大正藥房、大正藥房。大正藥房、大正藥房。



火災を起した東汽銀洋丸

銀洋丸が航行中 失火危険に瀕す

硝石爆発の懼あり危険信 損害莫大の見込

東汽銀洋丸は、昨午、南米航路に航行中、船中硝石が爆発し、船体大破損を蒙り、船長以下乗客百餘名が救助を要す。船は、南緯三十五度、西經八十度附近に沈没した。船長は救助を要す。船は、南緯三十五度、西經八十度附近に沈没した。船長は救助を要す。

新年進歩式 勇敢に闘ふ

本市進歩会は、昨午、新年進歩式を挙げて、勇敢に闘ふを期す。式には、各界代表者百餘人が参加した。

八幡船長以下客 易に船を去らす

八幡船長以下客は、昨午、船を去らす。船は、南緯三十五度、西經八十度附近に沈没した。船長は救助を要す。

乗組は一騎當千の 猛者揃ひである

八幡船長に配するに土橋、機師長に加藤一等運轉士、殊勲の尾上無電技師。乗組は一騎當千の猛者揃ひである。

火勢漸く 衰ふ

火勢は漸く衰ふ。船は、南緯三十五度、西經八十度附近に沈没した。船長は救助を要す。

本社東京特電

大正十三年度の海外移民四千九百名 原因は政府の南米移民奨励と労働賃金の好況の爲

夜警職 日本入街の 近々委員を 開き後任決定

定期總會 一月十一日に 在米福岡縣人会

撞球ジュニア 世界選手権獲得

火の矢組の 初試合

死者行方不明多数 酸鼻の極なる現場

北加日本語協會 理事會開催

木村参事官 今朝着

山嶽家達の 初登山

西北部遠征の 高橋二段大勝

仕事始め 諸學園合同で 慰問ダンス

岡山縣人会總會 新年演藝會

芝居活劇 芝居活劇

吉例七哩半 徒歩競走

耳鼻咽喉科 氣管支喘息

谷靴店 谷靴店

新田長市 新田長市

閉店廣告 閉店廣告

英語教授 英語教授

魚釣道具 魚釣道具

小幡女子裁縫學校 小幡女子裁縫學校

新學期生徒募集 新學期生徒募集

中村裁縫女學校 中村裁縫女學校

日本ホテル 日本ホテル

相馬茶店 相馬茶店

財滿商會

本社 大坂市北區五丁目
電話 九三九二
支店 東京、神戶、大阪、名古屋、京都、神戸、横濱、横浜、下関、門司、若松、博多、久留米等
桑港支店 桑港カラオケビル二階 電話 三三三三
電話 三三三三

共和樓

製造部 製造部
特別定額預金 利率年六分 (十年期普通預金)
定期預金 利率年六分 (六ヶ月普通預金)
通知預金 利率年六分 (六ヶ月普通預金)
無利息預金 利率年六分 (六ヶ月普通預金)
電話 三三三三

北米病院

Dr. LAU YIN-CHO
電話 三三三三

鮮魚、精肉

電話 三三三三

料理御

電話 三三三三

上海樓

電話 三三三三

利二郎

電話 三三三三

株式住友銀行

特別定額預金 利率年六分 (十年期普通預金)
定期預金 利率年六分 (六ヶ月普通預金)
通知預金 利率年六分 (六ヶ月普通預金)
無利息預金 利率年六分 (六ヶ月普通預金)
電話 三三三三

19--度年四十五大--25

記日中懐 記日用當
電話 三三三三

日本料理 小川ホテル

電話 三三三三

帝國ホテル

電話 三三三三

加州旅館

電話 三三三三

太平洋ホテル

電話 三三三三

府羅

電話 三三三三

THE YOKOHAMA SPECIE BANK LTD.

415-429 Sansome St., San Francisco, Calif.
P. O. Box 3125 Tel. Kearny 1897

防長旅

電話 三三三三

北米旅

電話 三三三三

日本商事株式會社

電話 三三三三

坂部裁縫學校

電話 三三三三

裁縫研究會

電話 三三三三

THE O. O. DRUG

電話 三三三三

SKA家具會社

電話 三三三三

職員錄

電話 三三三三

特選種子

電話 三三三三

紙用票投

電話 三三三三

集募式株

電話 三三三三

經濟的

電話 三三三三

波多江商會

電話 三三三三

波多江商會

電話 三三三三

波多江商會

電話 三三三三

若き血の燃ゆる君に

電話 三三三三

大補丸

電話 三三三三

胃腸丸

電話 三三三三

米國商會

電話 三三三三

米國商會

電話 三三三三

米國商會

電話 三三三三

米國商會

電話 三三三三



一九二五年に於ける海運界豫想と希望

太平洋の海運状態を考慮せよ

糸川生

一九二五年の海運界は、戦時中から戦後へと移行する中で、船舶の増産と需要の回復が期待される。...

懸賞論文當選者 第一流の大賞は、糸川生氏の「一九二五年の海運界」に授けられた。...

有名な家業が、戦時中から戦後へと移行する中で、船舶の増産と需要の回復が期待される。...

賀正 桑港の部

- 高田雷之助 有馬事務所 常光事務所 田中芳子 水原兵助 宮本島市 中田商店 八木イイク 板谷元雄 林豆腐店 一安博孝 田守吉弘 田村寅吉 田村信吉 羽衣亭 松の家 森川福松 望月滋司 吉澤豊作 三上志茂 三上アルエステット 白井省三 松本萬六 白井省三 稲津熊八 藤井米太郎

謹賀新年 桑港日本人種業組合

- 北米薬舗 〇〇薬舗 大正薬舗 大阪薬舗 謹賀新年 松尾愛治 高橋熊太郎 東洋美術商會 森口新次郎 店員一同 東京美術店 ミツシヨウ街二二七六 謹賀新年 美術雜貨商 〇カド商會 主人 岡本新吉 小賣部 桑港モンガモリ街四一七 郵便部 桑港モンガモリ街五七

賀正 奥殿市名刺交換

- 萬花樓 支那料理 マンダリン 山本時造 東洋軒 大正編 石島勘三郎 錦花樓 日本料理 中村竹之助 廣東樓 佐藤貞祐 上海樓 新上海樓 謹賀新春 劉日初 鈴木壽賀治 高村彦一 吉高棟 三井矢福太郎 土井清一 向井健次郎 村上甚吉 川口榮太郎 大石光二 狩野甚太郎 谷野武雄 田淵大次郎 岩本信二 井芹順藏 三坂房一 高橋商店 松末和吉 佐々木勘太郎 遠藤徳次郎 中国旅館 伴假家商店 岡本萬六 岡本正策 東洋商會 日米新聞 オクダ支社 店員一同 白澤漂舟

謹賀新年 日本病院

- あけまして お目出度う お多福亭 女連一同 安孫子久太郎 大野禎一 安孫子康作 大沼金作 秋山やそ 佐々木平吉 青柳國弘 佐々木戒三 浅野七之助 佐々木勇平 浅利徳一 佐藤利一 遠藤照治 清光慶 福地篤 重富俊雄 府波かめい 清水幸助 原信太郎 清水政雄 東榮藏 清水光三 日敷彦太郎 四至本八郎 堀川昇次郎 杉岡光男 一丸嘉久藏 田原ひで 池田實 武井武雄 飯塚謙三 武井武富 井上欣次 頼母木真六 石津實藏 寺田和助 菊地参平 寺田照義 木村正友 富田清萬 北村常太郎 渡邊哲四郎 北浦安太郎 山中仲二 松永庄吉 柳 宮木貞治 安河内富子 宮木義生 吉田宣光 森下ごめ 柳 永松一夫 中野房吉 海老名一雄 中野さみ 鷺津尺魔 西方長平 鷺谷精一 西山源一郎 小森貞治 奥津千恵 鈴木喜一 大野乙吉

立川直三郎 小野製糖株式會社	大澤榮三 博信社	津山昇 津山製糖株式會社	松尾守一 鈴木商店桑港出張所	今元善一 今元製糖株式會社	矢半田貞三 エミツチエール	尾崎善藏 尾崎製糖株式會社	松岡亮作 松岡製糖株式會社	瀧本爲三 瀧本製糖株式會社	安孫子久太郎 安孫子製糖株式會社	河西富太郎 日本ドライグース商會	小池實太郎 小池製糖株式會社	牛島謹爾 在米日本人會々々	小松隆 東洋汽船株式會社	兒馬重太郎 三井物産株式會社	堤汀 堤製糖株式會社	山田市太郎 山田製糖株式會社	本村良則 本村製糖株式會社	福地恒雄 福地製糖株式會社	小島久太 小島製糖株式會社	福地恒雄 福地製糖株式會社	本村良則 本村製糖株式會社	山田市太郎 山田製糖株式會社	堤汀 堤製糖株式會社	兒馬重太郎 三井物産株式會社	小松隆 東洋汽船株式會社	牛島謹爾 在米日本人會々々	小池實太郎 小池製糖株式會社	河西富太郎 日本ドライグース商會	安孫子久太郎 安孫子製糖株式會社	瀧本爲三 瀧本製糖株式會社	松岡亮作 松岡製糖株式會社	尾崎善藏 尾崎製糖株式會社	今元善一 今元製糖株式會社	矢半田貞三 エミツチエール	松尾守一 鈴木商店桑港出張所	津山昇 津山製糖株式會社	大澤榮三 博信社	立川直三郎 小野製糖株式會社																																																																																																	
谷勇 ウエスタン生命保險株式會社	高桑小一郎 高桑信吉	小川眞吉 野野商店	長磐 野野商店	桑谷喜義 桑谷製糖株式會社	清水喜六 清水製糖株式會社	江川源吾 江川製糖株式會社	小森時人 小森製糖株式會社	杉本幸次郎 杉本製糖株式會社	福田幸次郎 福田製糖株式會社	角田常男 角田製糖株式會社	中原初喜 中原製糖株式會社	宇野正道 宇野製糖株式會社	村上隆一 村上製糖株式會社	磯川辰次郎 磯川製糖株式會社	長谷川正 長谷川製糖株式會社	中溝英次 中溝製糖株式會社	村井次郎 村井製糖株式會社	堂本譽之 堂本製糖株式會社	野坂滋明 野坂製糖株式會社	嘉納千太郎 嘉納製糖株式會社	川島耕作 川島製糖株式會社	堂本譽之進 堂本製糖株式會社	森下龜太郎 森下製糖株式會社	多和田立雄 多和田製糖株式會社	駒田貞良 駒田製糖株式會社	齊藤重光 齊藤製糖株式會社	小林彦次郎 小林製糖株式會社	市橋倭 市橋製糖株式會社	佐藤鶴吉 佐藤製糖株式會社	荻澤進 荻澤製糖株式會社	石館禮次郎 石館製糖株式會社	三戸直 三戸製糖株式會社	丹羽俊二 丹羽製糖株式會社	小笠原雄二 小笠原製糖株式會社	杉山航三郎 杉山製糖株式會社	安田半次郎 安田製糖株式會社	渡邊久克 渡邊製糖株式會社	魚屋正次 魚屋製糖株式會社	木庭利器三 木庭製糖株式會社	西本良祐 西本製糖株式會社	澤田耕之助 澤田製糖株式會社	石原要 石原製糖株式會社	杉山篤二 杉山製糖株式會社	高尾鶴松 高尾製糖株式會社	青木道嗣 青木製糖株式會社	和泉長松 和泉製糖株式會社	香川常吉 香川製糖株式會社	瀧井千尋 瀧井製糖株式會社	野田哲男 野田製糖株式會社	福井常次郎 福井製糖株式會社	中島醇 中島製糖株式會社	竹森松太郎 竹森製糖株式會社	増子源藏 増子製糖株式會社	柴田清 柴田製糖株式會社	平島音松 平島製糖株式會社	池ノ上文二 池ノ上製糖株式會社	陰山鐵次郎 陰山製糖株式會社	藤森直和 藤森製糖株式會社	宮本孔信 宮本製糖株式會社	吉岡金太郎 吉岡製糖株式會社	辻坂震三 辻坂製糖株式會社	白井和三郎 白井製糖株式會社	東ヶ崎菊松 東ヶ崎製糖株式會社	東ヶ崎潔 東ヶ崎製糖株式會社	金澤芳太郎 金澤製糖株式會社	三保周策 三保製糖株式會社	本田茂男 本田製糖株式會社	小松完一 小松製糖株式會社	長崎興仁 長崎製糖株式會社	細田徳一 細田製糖株式會社	加古得哉 加古製糖株式會社	富田勝重 富田製糖株式會社	猪野邦策 猪野製糖株式會社	豊本與八 豊本製糖株式會社	福留與之丞 福留製糖株式會社	岡本春三 岡本製糖株式會社	歌崎太郎 歌崎製糖株式會社	牧田貫一 牧田製糖株式會社	麻生山藏 麻生製糖株式會社	井上甚九郎 井上製糖株式會社	須川政次郎 須川製糖株式會社	藤井澄人 藤井製糖株式會社	土井武一 土井製糖株式會社	佐藤又太郎 佐藤製糖株式會社	松岡萬之助 松岡製糖株式會社	片瀬太門 片瀬製糖株式會社	山崎友光 山崎製糖株式會社	糸川三郎 糸川製糖株式會社	伊藤三五郎 伊藤製糖株式會社	本多賢三 本多製糖株式會社	田中健三 田中製糖株式會社	田中正 田中製糖株式會社	田山敬喜 田山製糖株式會社	中原福藏 中原製糖株式會社	野村貞吉 野村製糖株式會社	北川正惠 北川製糖株式會社	橋田良明 橋田製糖株式會社	渡邊敏 渡邊製糖株式會社	井戸本保之助 井戸製糖株式會社	林秀樹 林製糖株式會社	林徳太郎 林製糖株式會社	西齒科醫院 西齒科製糖株式會社	小川榮一 小川製糖株式會社	田中敏太郎 田中製糖株式會社	山本辰雄 山本製糖株式會社	藤田省三 藤田製糖株式會社	檜垣益一 檜垣製糖株式會社	永井元 永井製糖株式會社	永井ゑい子 永井製糖株式會社	佐々木千重 佐々木製糖株式會社	東福義雄 東福製糖株式會社	多賀義仁 多賀製糖株式會社	石川豊太郎 石川製糖株式會社	市尾初子 市尾製糖株式會社	同龍夫 同製糖株式會社	市尾喜一郎 市尾製糖株式會社	森淳吉 森製糖株式會社	田島準一郎 田島製糖株式會社	秦牧師 秦製糖株式會社	津田彌三郎 津田製糖株式會社	美以青年會 美以製糖株式會社	富澤清 富澤製糖株式會社	沼尻長十郎 沼尻製糖株式會社	鈴木孝志 鈴木製糖株式會社	同きな子 同製糖株式會社	瀧口啓次郎 瀧口製糖株式會社	具志堅政賢 具志堅製糖株式會社	金子峰 金子製糖株式會社	寺澤久吉 寺澤製糖株式會社	シスター幼稚園 シスター製糖株式會社	相澤美代志 相澤製糖株式會社	波多江實 波多江製糖株式會社	龍野鉦次郎 龍野製糖株式會社	福元長右衛門 福元製糖株式會社	小形安藏 小形製糖株式會社

恭賀新年

桑港バイン街七十番

日本ドライグース商會

社員一同

一月元旦

謹賀新年

一月元旦

鈴木商店桑港出張所

本店 神戸市海岸通十番地

謹賀新年

三井物産株式會社



賀正

防長旅館

館主 有馬時國
支配人 錦本一郎

るびすホテル

郷原謙藏
外一同

北野ホテル

桑港クレイ街九四九

松岡ホテル

桑港グラント街五四五
主人 小野田彦太郎

熊本屋旅館

熊本屋商店
館主 土田和三

近江屋

旅商 湯
びわこ館店

店主 森野庄吉
支配人 森野宇三郎

永本ホテル

館主 永本要藏
支配人 服部彦次郎
運送部 栗原貴之助
自動車部 ジョー

賀正

上野長太郎

桑港アレントン街一八
電話一五〇二
外一同

賀正

三枝松康雄

桑港ジャクソン街八〇一
電話二九二五
外一同

恭賀新年

大正十四年一月元旦

桑港東京俱樂部

外部員一同



明けまして御目出たう

相變らず御引立を願ひます

菊川亭

ケリー街一六〇六
電話ウエスト六四二五

主人 菊川甚之助
板前 福井鷹次郎
なつ子 小よね
小梅 じし子 しも子



明けまして御目出たう

本年も相變らず

みどり

サター街一八一五
電話フイルモア二二四〇

深雪 みやか
かほる はるみ 一恵



謹賀新年

うすびみ

はる子 てる子
笑子 ささ子

御料理

うづまき

グラント街五一〇
電話ダグラス二九一〇

主人 大川乙作
繁子 榮子
みやるり子 つや子



霧の都にて

土田三太郎



人種等は米國の建國以來の歴史に...

死んだと云はれて未だ生きて...

少くの不事苦しみは...

「精神獨立の宣言」の一節に...

「精神獨立の宣言」の一節に...

「精神獨立の宣言」の一節に...

「精神獨立の宣言」の一節に...

「精神獨立の宣言」の一節に...

「精神獨立の宣言」の一節に...

- List of names and addresses: 小池實太郎, 二宮利作, 酒井喜多市, etc.

Advertisement for Japanese Goods Association (日本貿易商會) and other businesses, including '賀正' (New Year Greetings) and '謹賀新年' (Respectful New Year Greetings).

靴工同盟會本部 矢田部孝造	相原練之助	谷幸助	石井樂三	八木勇熊	中島鎌太郎	宮川靴店	中村一郎	林かつ	戸谷房次郎	宇佐美源次郎	紀の國屋旅館 日米旅館	木下房市	橋口末吉	南州館	野口才助	森下平三郎	玉城龜	尾崎龜三郎	中本久治	南部千代太郎	進實正	高田彙吉	萬木喜三郎	藤井理髮館					
村田弘太郎	山崎千吉	三原床	笠畑芳松	都春日床	大多和床	片山貫一	矢部床	鈴木床	岡本	須賀和一	逸木源三郎	林俊太郎	井木亥一郎	三保七五三	小松憲	木下壽雄	田岡旅館	齋藤良一郎	みなご湯	大正湯	宇井邦造	富士湯	寛龜四郎	森末要次郎	戸嶋商會	高井啓三	大森彦太郎	角勇治	安阿内龜太郎

かまぼこ製造卸小賣
鮮魚並に食料品一切
金門商會
桑港ゲリー街一五二九

和洋食料品、雜貨、玩具類卸小賣
寶上商店
ブキヤナン街一七〇七

天麴味噌製造所
松原大吉

ブキヤナン街一八三六
長商店
電話ウエスト二五五二
子供着物類一切
ラダナ街一五四七

河内屋商店
辻坂なみ

日米物産商會
店員一同

將口富太郎
將口洋服商會
外一同

桑港ブツシユ街
ブキヤナン街の角
OK食料店

ブキヤナン街一五二三
和田石炭商會
和田安松

ブキヤナン街一七二五
北米病院
原昌親

謹賀新年

一月元日

恭賀新年

一月元日

興行部

桑港興行株式會社

社員一同

本店 桑港ゲリー街一五〇五

本年の御歸朝には大改善の

東洋汽船に御試乗下さいませ

- 一、各船とも參等に寢具を無料にて貸與、朝食前コーヒ、クラツカー午後三時茶菓を出し、食事の皿數を増し、時々新鮮なる菓物を添ふ餘興にも一層趣向を凝らし、ボーイを増員し御待遇懇切丁寧。
- 二、今春の各船定期修繕入渠を機とし、二等室並に設備を改造し、一等に近からしめる事
- 三、桑港横濱間航海日數は米國船同様十五日です

東洋汽船會社

○昨年七月實施の米國移民法は一方に於て在留同胞各位の一時歸朝再入國を簡便ならしめ手續の費用も低廉にて其の再入國許可証あれば即日上陸を許され移民局に送られる不便がありません
○旅は道連れ世は情け日本人同志の親しみと暖かみに満つる我が社の大客船にて愉快な御歸朝の旅を遊ばしませ

桑港マアケット街五五一
電話サター三九〇〇



THE JAPANESE AMERICAN NEWS

650 ELLIS STREET
SAN FRANCISCO, CALIF.

TELEPHONE PROSPECT 238

K. ABIKO, Publisher

NEW YEAR'S EDITION

FOREWORD

It has occurred to the Editor of the Japanese American to secure a choice number of articles for his publication about the higher life and progress in Japan by men capable of speaking on that theme. The plan was conceived in the spirit of the largest friendliness.

The authors of the articles are friends of Japan, but not more of Japan than of other countries. It might be better to call them experts or connoisseurs in their knowledge of Japan but owing to the especially intimate relations between the two countries and to special advantages, they were fortunate enough to possess by visiting and studying Japanese life and institutions. It will be seen that the writers are eminent educators and that they are mainly interested in the wonderful progress that education has made in recent years. It is not the boastful progress in material prosperity but growth in character and in community of spirit with other nations. It is not the Westernization of Japan as such but rather Westernization under the auspices of the Old Japan, the interesting combination of the two. This is really the problem of every country in the world today, of America too.

The discussion is primarily intended for the readers of the Japanese American, i.e. the Japanese in America, but also for thoughtful Americans. Therefore, it is very desirable to give them as wide a publicity as possible.

The Editor.

Dr. David Starr Jordan's Letter.

Dear Mr. Abiko:

I read not long ago a statement, purporting to come from a leading member of our government, that the Pacific Ocean was "the meeting place of two antagonistic civilizations." This statement I have denied, for whatever is antagonistic to any civilization can not be a civilization itself. Certainly there is no real antagonism between the old civilization of Japan and the new civilization, (originally British, but strengthened from many sources) of America.

The long isolation of Japan, dating far back in her feudal system, has brought about the evolution of manners and customs, different ways of maintaining the individual and social traits and functions of a common humanity. But that Japan learned to do without chairs, to sleep on the floor and to speak one language while writing another does not constitute an "antagonistic civilization." On both sides of the ocean, the realities of humanity are the same, the same standards of right and wrong exist (at least among the great majority, all those who have standards at all). The fundamentals of love, of hope, of reverence, of duty, remain the same. These differ from ours in the Twentieth Century, no more than ours of today differ from those of our own ancestors, a few hundred years ago. A nation should not be judged alone by its actual achievements but by the direction in which it is moving. The Japan of today, though but newly aroused from the feudal system, is in almost all ways fully abreast of the best civilization in the world outside. Since I first visited Japan, the great Imperial Universities at Kyoto, Fukuoka, Sendai and Sapporo have been established, besides several similar institutions independent of government control, and with standards quite as high as the corresponding institutions in America or Europe. Meanwhile the work of the lower schools has been correspondingly enhanced. The value of mental training is everywhere recognized. The study in similar ways of the same elements of knowledge is drawing thoughtful people on both sides of the Pacific more and more closely together.

In the year 1900, I was asked by a teacher's association in Tokyo, to speak to them on what Japan has to learn from the educational experience of the United States. I stressed the hampering influence of the Caste system, the weakness of following too rigidly traditional lines of thought and action, of the need for more serious and more thorough education of women to fit them for more intellectual tasks than then seemed to be open. I also urged attention to physical training, and the abatement of excessive night study, which results in melancholy and nervous derangement. A phase of this appeared then in the form of suicide among students by leaping off Kegon Falls. The development of baseball (is now Japan's national game) among students shows a change in this regard. After this talk, a Stanford graduate, K. Otani (then professor in the Tokyo Military School) who had vigorously translated my words, added: "And I gave them some licks of my own too!"

Among things in which America can learn of Japan, one is the unfeeling courtesy of the people. The fine art of personal relations is better developed in Japan than in any other country. Japanese students excel most others in their careful attention to details, which is the foundation of their notable successes in Medicine and Chemistry. Modesty, sincerity and sobriety are traits of no one country, but most of our Japanese students in America are models in these regards. What both these and all countries need is the further development of the spirit of science, by which men become free through their relation to truth in details as well as in generalities. The free man in all lands is the one who forms his own opinions, on his own evidence, not through tradition nor emotion, but on the foundations of what he actually finds out and knows to be true.

Very truly yours,
(Signed) David Starr Jordan

My Impressions of Japanese Activities in California.

By Robert E. Park.

Dr. Robert E. Park is the head of the Department of Sociology in Chicago University. He has made an excellent survey of the negro situation in America. Recently he has made a survey of the oriental peoples in California and thus qualified to speak with authority at first hand on this side of the subject. The following article is based on the results of expert investigations in California.

Never having been in Japan, my knowledge of the country, is confined largely to the reading of two delightful records, the books of Lafcadio Hearn and Robertson Scott's volume on the "Foundation of Japan."

My impression, gathered from these books, is that of a most interesting, most unique people, who as the result of an extremely fortunate experience have attained not only a very high stage of civilization, but what is really more important in this modern world, a very high state of national morale. My more intimate knowledge of the Japanese has been gained by the study of certain Japanese communities in this country, the most interesting of which was the little town of Livingston. To my knowledge there is no other community on the Coast where there is more mutual confidence on the part of both Americans and Japanese than here. While ordinarily it takes some time for immigrant people to adapt themselves to American life, the Japanese of Livingston appear to have adapted themselves more intelligently than most, so that the results of their endeavors are really astonishing.

In spite of the difficulties which they have encountered and in spite of their own uncertainties concerning the outcome of their experiment, they have remained cheerful and confident and have retained their faith in human nature and the American people. In spite of my somewhat extensive acquaintance with immigrant peoples and communities, I do not know any other group who have succeeded so well in facing their situation and in feeling themselves into the spirit of American life. The experiment at Livingston represents a very real contribution to American life.

I am happy to know that Mr. Abiko has undertaken to support through his paper the program of sending to Japan native born Japanese, from the United States. I am sure that their visit to Japan will be of value, not only to themselves but to Japan and the United States as well.

The native born Japanese of the United States are bound by the incident of their birth to be interpreters. No one else is so well able to explain the feeling of the Japanese to the American people, nor the feeling of the American people to the Japanese of Japan. To contain within oneself two cultures instead of one imposes a somewhat heavy burden, but it is also a burden of much richness. It involves in any case a greater liveliness of mind, but it involves in the case of the native born Japanese also a greater responsibility. The acquaintance of the Oriental and Occidental peoples is as yet in terms of the world's history a very brief one, and certainly it is so far a very partial one. Those who are in a position to know the cultural history, the sentiments, and the economic situation of two such nations as Japan and the United States are in a unique position to further this as-yet partial understanding.

This being the New Year Season, it gives me real pleasure to send my greetings to all the Japanese people of California, who showed me so much consideration while I was on the Pacific Coast and who have been so helpful in aiding me to get the information that I wanted in regard to the Japanese in spite of the fact that they must frequently have been very dubious about the value of some of the inquiries which I was making.

My Impressions of the Japanese in Japan.

By George Gleason

Mr. George Gleason was Secretary of the Young Men's Christian Association in Osaka for eighteen years. He knows Japan thoroughly from the religious and international point of view.

Japanese young people growing up in the United States should not forget that they may make a unique contribution to the enrichment of American life. The American people more and more are realizing that the so-called foreigners in this land have a definite contribution to make to the future culture of the nation. May I remind the Japanese young people of certain characteristics of their forebears which, if interpreted to America, might not only be appreciated by the American people, but might add greatly to the value of our Occidental civilization.

The celebrated Prince of Mito had cast for the members of his household a number of small brass images of farmers in their working clothes, which, placed on their food trays while they ate, reminded them of the toil of those who provided them with food. This little story illustrates the gratitude which most city dwellers fail to feel toward those farmers, miners, and lumbermen whose work has made our urban comforts possible.

As Mrs. Gleason and my two children were one day walking up the hill from the railroad station to my house near Osaka, a Japanese gentleman with a large parcel caught up with them and asked them to stop. He put his bundle on the ground and took out presents for each one of the children. He was an entire stranger.

Coming home from church one Sunday ten years ago, we rode between stations on the crowded Tokyo express. As the children got off the train a Japanese handed my youngest daughter a basket of beautiful apples. As I had to ride on further I spoke to the man and found that he was a Japanese settler in southern California and had been home to Okayama for a visit. The generosity of Japanese people, sometimes even to strangers, might be made a great lesson to Americans.

At Dairen during the return of the troops from the Russo-Japanese War my little girl, three years old, was out walking with her

(Continued on Page Nineteen.)

YAMATO DAMASHII

By KENNETH SAUNDERS
Author of "Epochs of Buddhist History" etc.

"Japan," says Kakuzo Okakura, "is the museum of Asiatic Civilization. . . . On her shores every wave of Oriental thought has left its traces." Today the visitor to such peaceful and lovely places as Nara and Horiuji realizes how great is her debt not only to India and to China, but to Korea which so strangely blend the two civilizations. Is it not largely this which makes Japan so significant and interesting today? It is not merely, or chiefly, her amazing progress in industrial civilization; it is that the eyes of Asia look to her as one brother looks to another, younger, stronger and more successful. She is capable of being the champion of the Asiatic peoples and of paying back in noble ways the great debts of the past, just because with all her brilliant modern achievements she has clung to her ancient heritage.

"This it is," says Rabindranath Tagore, "which has given heart to the rest of Asia. . . . that Japan, the child of the ancient East, has also fearlessly claimed all the gifts of this modern age for herself. . . . Japan is old and new at the same time."

Japan, like China, has evolved something unique out of the common background of Asiatic culture—from the old nature-cults, the moral teachings of Confucius, the mysticism of Lao-tze, the artistic heritage of Buddhism she has developed her own spiritual heritage, *Yamato Damashii*.

Of this heritage she is grimly and intelligently tenacious. Let us look, for example, at her amazing recent history and we shall see that she owes everything to her ability to hold fast to it in the midst of meteoric change. A great nation must combine stability with mobility, and Japan has been in this supremely great.

The two elements in her ancient culture to which Japan has most tenaciously clung are loyalty to the Emperor, and filial piety. It is only by understanding these that we can understand Japan, and they must be studied in their full context and in the light of her long history. Take, for example, the Restoration of 1867, which we flatter ourselves was due to Commodore Perry and to Japan's eager imitation of Western things. It was, in fact, much more, as it is called a *restoration*, a harking-back to ancient things which had stood the test of time, and which were rehabilitated in the face of new and pressing needs as Japan swung into the current of the modern world. First, was the temporal power of the Emperor who had for centuries been overshadowed by the Shoguns and treated with insolence; whatever Japanese historians may say (and they are apt like other patriotic writers, to say a great many things grossly untrue), the Sun-dynasty had in fact suffered almost total eclipse. The new Japan took her neglected god out of his shrine and gave him the center of the stage, even though it was still largely as a puppet that he held his place, and the elder statesmen, representing the great families of Satsuma and Choshiu, pulled the strings. With an equal naiveté the ancient Shinto religion, which had only survived by allowing itself to be absorbed into Buddhism, was now made the state religion and ancient myths were promulgated as sober fact.



Prince Shotoku, the Father of Japan. From a contemporary Korean portrait by France Asia.

The Constitution which has seemed to so many a copy of things European, was in fact an adaptation of that which had been adopted from China as far back as the seventh century by the far-sighted Prince Shotoku.

In other words, the restoration was largely a reaction, and it is this which makes Japan unique among great modern nations, for whatever we may think of all this, the result of it is that Japan alone amongst the peoples of Asia has evolved a strong government, and has succeeded in bridging the great and dangerous gulf between the past and the present. It is always true that a revolution is like an amputation; what is kept is more important than what is cut off; and in Japan this has been particularly true. To understand the spirit in which it has been done let us remind ourselves that again and again when there have been party quarrels and clan wars in Japan a word from the Emperor has restored order; that limited as his powers were, the Emperor Meiji Tenno was a man of remarkable judgment, and that autocrats as they were and are, the Elder Statesmen have shown absolute devotion to their country and an astonishing vision of her needs. If the British Empire defends its consti-

(Continued on Page Nineteen.)

1 "The Ideals of the Orient," ch. I.
2 "Nationalism," pp. 68-69.

SHOTOKU - Japan's "Father of Civilization"

By James A. B. Scherer.

The author of the following article on Prince Shotoku, the Father of Japanese civilization, is well qualified by actual residence and familiarity to give an account of that interesting episode.

Many times in my youth I visited Washington City without ever crossing the river to Mount Vernon. When at last I did go, only a few years since, my faith in America was refreshed. Our country has its faults, but they are not the faults of its founders. The serenity and simplicity of the Father of his Country are felt at Mount Vernon as an actual presence, and the visitor comes away comforted with the faith that Washington's spirit somehow survives.

Although I spent five years - long ago - in Japan, it was only last year that I went to Horiuji, notwithstanding earlier visits to Nara, a few miles away. As everybody knows, Nara was Japan's first permanent capital, and indeed her first city in any true sense of the word. But it is not so generally known that there would have been no Nara except for Horiuji and for what was achieved there by Shotoku Taishi. Native historians such as Rai Sanyo call him the Father of Civilization.

When Prince Shotoku was born, in 572, A. D., Japanese life was almost as primitive as Ainu life is today. Up in Yezo you see, instead of houses, thatched hovels, without floors, chimneys, or windows. You find no native literature, no art except the crudest handicraft, and only the rudest of manners. Agriculture is almost unknown, for the Ainu make shift to get on by hunting and fishing. Their religion is a simple nature-cult, bound up with ancestor worship. And all this is a rough snapshot of Japanese life when Shotoku Taishi was born.

The first ray of Buddhism, the light of Asia, had just entered Japan. "The Aryan Path", as Gautama himself called his teaching, was already a thousand years old. In its long sweep across Asia it had accumulated masses of those very dogmas against which Gautama protested. But the main propulsive power of every successful religion is some great personality, and no amount of superposed foreign matter could obscure the sweetness and strength of Gautama's character or his main tenets of Intelligence, Self-control, and Kindness. Adoring him, Asia had laid all the rich trophies of its ancient art at his feet, and when his message finally reached young Japan, it brought this art with it. Shotoku, becoming Prince Regent at the early age of twenty, resolved by means of Buddhism and its art to enlighten his people. This great dream possessed him, turned him into a superman. From the mainland of Asia he brought over hosts of Buddhist teachers - architects, sculptors, bronze-founders, clay-modelers, masons, gilders, tile-makers, weavers, and painters; all those artists-artists, needful to effect his purpose - and then studied under them, so that he might personally direct, down to the minutest detail, the materialization of his dream.

Singling out as his site the head of a charming valley, with massive green mountains for background, he called into being "storied pavilion and pagoda, until at last his dream stood complete before him, the great monastery temple Horiuji, built in arcades with tower gates about an enormous sanded court, and centred with blue-tiled palaces that rose up the mountain-slopes terrace behind terrace" - one of the great temple-palaces of Asia.

This architectural triumph was dedicated to Gautama the Buddha by his princely disciple, Shotoku, in 616, A.D.; a millennium to the year before the year in which Shakespeare died; and the touch of one man had inaugurated an "Elizabethan age" in Japan. There is nothing quite like it in history.

In spite of disastrous conflagrations, three of Shotoku's wooden structures still stand - twice as old as the oldest cathedral in Europe. A distinguished American architect, Ralph Adams Cram, pronounces them "the most precious architectural monument in all Asia. They are the final things; beyond them is no further possibility."

Shotoku brought about the erection of forty-six temples in different parts of his empire. His devotion led him to become the first Japanese sculptor, and his genius made him one of the greatest. At Horiuji one may still see what may be the tribute of his own hands to Buddhism, in a heroic figure of Kwannon; unconventional, vital in every flowing line, the great benign face illumined with the most beautiful smile that has ever been carved upon wood. "It is the face of a sweet, loving spirit, pathetic and tender," as Fenollosa discerns. "The impression of this figure, as one views it for the first time, is of intense holiness. No serious, broad-minded Christian could quite free himself from the impulse to bow down before its sweet powerful smile. With all its primitive coarseness of detail, as in the feet especially, it dominates the whole room like an actual presence. This finely imaginative work, whose genius we can trace from the suggestions of preceding models, is clearly the work of a master mind, one capable of transcending conventions, or rather of moulding them to express a free spiritual conception. This is why we more than give ear to the Horiuji tradition that the work came from the hands of Prince Shotoku himself. His was certainly a mind capable of conceiving it; and the varied elements from which he drew suggestions of form - Chinese, Korean, and Japanese - lay ready to his hand."

Shotoku was a man of multifold talent, versatile but always distinguished. A magnetic preacher, throngs filled his temples, and were converted wholesale to Buddhism by his resistless persuasion. A pioneer historian, he gave to his subjects their first national chronicle, now unfortunately lost. As statesman and lawyer he excelled, providing the first written laws. Some of his precepts seem to echo the Bible - "Chastise that which is evil, and encourage that which is good!" "Good faith," he comments, acutely, "is the foundation of



right. In everything let there be good faith, for in it there surely consists the good and the bad, success and failure.

He knows how to be shrewd, even witty: - "Let us not be resentful when others differ from us! All men have hearts, and each heart has its own leanings. Their right is our wrong, and our right is their wrong. We are not unquestionably sages, nor are they unquestionably fools. Both of us are simply ordinary men."

Perhaps his pithy definition of statesmanship has never been bettered: "To turn away from that which is private and to set one's face toward that which is public - this is the path of a minister!"

Japanese historians scarcely overrate Shotoku when they call him the father of his country's civilization. He left behind him peace where he had found strife and anarchy, the light of civilization in the place of the darkness of semi-barbarism, the knowledge and practice of art and science where there had been none before, reverential observance of a religion which was destined to mould the character of his countrymen for more than a thousand years." Ancient chronicles say that when he died, in the year 621, the farmer ceased from his plough, and the pounding-woman laid down her pestle; they all said, "The sun and moon have lost their brightness, heaven and earth have crumbled to ruin - henceforth in whom shall we trust?" Nobles and commoners alike, the old, as if they had lost a dear child, the young, as if they had lost a beloved parent, filled the ways with the sound of their lamenting.

Apart from his marvelous achievements, Shotoku Taishi interests a foreign observer because he shows Japanese character and life at their best before they came under the spell of the "Great Change" - or Daika. It was chiefly this "Great Change" that made Japan so unlike the Occident and so much like China. The main difference between the West and the Far East today is a difference in social units. In the West the social unit is the individual, in the East the social unit is the family. In America a secretary in the President's cabinet writes a book on Individualism as the keystone of the whole social system. In Japan, as in China, the supreme duty of every individual is self-abnegation; consecration to the service of the "family", a word having far larger meaning than with us. Here "family" means father and mother, son and daughter, perhaps grandparents and grandchildren. There it means all the relations and their dependents, that is to say, the clan. The Japanese nation is not an aggregation of individuals, as ours is, but of families. The Western nation has been compared to a pyramid of individual stones; Japan to a pyramid of pyramids, each of which builds into a larger one until at last all of these massed pyramids form the great completed pyramid, the nation, with the Imperial family as capstone. Thus the nation becomes the Super-family, and the Emperor, Father-over all.

In the time of Shotoku this imported system had not yet crystallized; a man was still free to serve some higher obligation than that of family. This fact is powerfully illustrated in the case of Shotoku's son, Prince Yamashiro, who sacrificed himself and his family and his claim to the Imperial throne for what seemed to him to be a higher duty. Informed that ambitious Soga clansmen had decreed the extirpation of his family, and being urged to raise an army against them, Yamashiro refused to plunge his country into the woes of a civil war.

"I do not wish it to be said by posterity," he declared, "that, for my sake, one single soul has mourned the loss of father or mother. Is it only when one has conquered in battle that one is to be called a hero? Is he not also a hero who has made the country firm at the expense of his life?"

Withdrawing into one of the temples his great father had built, where he was soon besieged by the unscrupulous Soga, Yamashiro committed suicide - an example immediately followed by all the other members of his household.

Even this brief study of the first chapter of Japanese civilization, before it had been conventionalized by Chinese influences, gives a most interesting result. It shows that the young Yamato race, compounded principally of Tartar and Malaysian elements, was gifted

(Continued on Page Nineteen.)

恭賀新年

大河原富太郎	田中洋食店	高田洋食店	高木舜輔
富田勘二郎	伊達商店	ウエスタン洗濯所	増田徳次郎
坂本節吾	平智山	村山武重	矢倉忠夫
野津信	濱住球場	吉田眞作	谷田部保
小澤周	フレスノ肉店	榮田産院	吉田壽
後藤利一	村嶋代次郎	山根岩吉	關舎武一
白山紀一	田村政一	松田源次郎	松山友藏
村谷儀二郎	大上ホテル	向井巧	佐藤利助
上丸子三一	毛保健作	山本吉太郎	松本弘整
ホーム薬店	スター洋食店	小嶋エキスフレ	末川金一
音堂床	栴田復一郎	小松三之助	同藤好枝
フレスノ魚店	南海屋旅館	白井順吉	加藤好枝
三井仙八	藪野勘四郎	廣嶋屋旅館	有江正次
光原球場	富士洗濯所	加藤安太郎	小長井已義
矢田芳郎	坪田壽平	福島雷次郎	長尾英義
瀬戸イサミ	神山寫真館	安孫子博	布市
香本貫一	みかどホテル	太田太郎	三島玉場
池田杉松	山崎寅次郎	村上七郎	ローズ曹達水製造所
新井珈琲店	百瀬眞澄	西村完一	森本久太郎
荒木直次	玉屋時計店	藤村佐平太	日米薬舗
伊藤呉服店	産黄金魚店	原田權四郎	永山昇
松本漢語	大野信吉	濱中洋食店	布市
寺前清四郎	高橋以敬	逸見商店	林病院
河原義三	岩田一郎	石田球場	橋場病院
柏屋菓子舗	正木床	山見坂勇三郎	橋場嘉之松
福島熊藏	ジョージ寫真館	楠彌太郎	布市
中谷芳造	西田市大郎	河本兼吉	小柴病院
結城珈琲店	陣川喜市	福田珈琲店	小柴文九郎
中井勝次郎	奥田洋食店	佐伯六郎	村山三十五郎
		活動寫真館	安藝龜三郎
		皆本慶次郎	

丸亭 主人 江後	港すし 若山	六華亭 布市支那アレー街	旭亭 室田兼次郎	岡山縣人會 片山壽太	大和旅館 主人 村山善平	OK・グラージ 電話二貳壹二	リパグラージ 布市ジ一街八壹壹
-------------	-----------	-----------------	-------------	---------------	-----------------	-------------------	--------------------

謹賀新年 大和亭 山田才吉 廣川浦助	謹賀新年 龜鶴亭 中野	謹賀新年 千鳥亭 河沼	謹賀新年 花月亭 御料理 あづま亭	謹賀新年 天賞堂本店 東京薬店 鹿利行 泰藏 利行とみ子 楠數之介	謹賀新年 フレスノ市 同學園 京極 逸藏 加來 智藏 沼田 智圓 奈良 智馬 藤井 龍馬 中井 龍智 新井 龍智	謹賀新年 ドイツスエウ ジラゲ 〇〇五一街シーカ 〇五一二話電 筒井 枝井 三友 友枝 竹川 友枝 吉本 川友 辻本 川友
-----------------------------	-------------------	-------------------	-------------------------	--	---	--

在留日本婦人の

反省を促したい

大澤まさ子夫人談

私はいつか米人の婦人の高きれば、顔も有様だ。...

新になる事の悲哀

春舟 耶

過ぐる一歳の間、私に何が起つたか、...

二世同胞の教化は

御両親の双肩に

鈴木金門園長夫人 鈴木きよ子談

私が幼少の御子と共々、此の地から...



元日のはじめの風景

ハーストビルディング 第四一四號室

大河原法律事務所 主任 加藤 奥野庸太郎

貿易商

山手ブラザーズ 山手正男

和洋食料雜貨

クラムス商會 中井清次郎

和洋食料雜貨直輸出商

ウエスト貿易商會 高橋繁太郎 高橋米藏

井上洋服店 井上牧次郎

和洋食料品雜貨

萬屋商店 勝浦直太郎 外店員一同

自動車修繕

塗替所 湯蓋新一

調剤の御依頼に應ず

日本藥店

切花卸商

恭賀新年 榎本商會 桑港第五街一五九 電話 ガーブルド 四五四二

謹賀新年

ユニオン精米會社 一月元旦 社員一同

恭賀新年

パナマ自動車會社 一月元旦 西村音之助 外社員一同

正賀

フ井ルモア街支店 日本人部主任 加來藤太

謹賀新年

デユポント商會 一月元旦 鷺塚 兼吉 外店員一同

直輸入卸小賣商

桑港グリー街一五〇三

賀正

サリナス市

護賀新車

サリナス市

湯木旅館

電話五三〇

湯木勝一

尾上善八	藤野美角	藤岡勝太郎	鬼塚留藏	平林三太郎	山下喜平	豊島淺吉	岡覺次	尾鼻林之助	中田彦兵衛	高田伊助	小林與太郎	長野久吉	下司竹次郎	田島隆之	二宮靜男	杉岡清次郎	種苗園	山中丈吉	住田甚太郎	大可徳松	小林幸次郎	上妻福藏
------	------	-------	------	-------	------	------	-----	-------	-------	------	-------	------	-------	------	------	-------	-----	------	-------	------	-------	------

杉田兄弟	數田秀夫	增本秀吉	櫻井次郎	井上庄太郎	マウンテンビユー	酒井寅藏	米元常楠	白木勘次郎	鎌田與右衛門	高野玉吉	小池啓次郎	森島幸一	本田熊太郎	森岡慶次	平林利市	松島美須子	今井隆二郎	木長安三郎	阿部和七	小林幸三郎	西村伊三郎	帝國グラージ	舟引三三二	中村寅次郎	宮本彦喜	清村勘十郎	平林利作	岩崎養殖場	岩崎虎楠	山崎源之丞
------	------	------	------	-------	----------	------	------	-------	--------	------	-------	------	-------	------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	--------	-------	-------	------	-------	------	-------	------	-------

明渡柳助	馬場岡政雄	出口司馬太	江崎藤之助	二間瀬宇助	江田市郎	稻葉兼太郎	一氏菊次郎	入江眞澄	兒玉節二	小谷源之助	川守田英一	景山才一郎	上河内徳一	小宮柳太郎	三浦辰次郎	増田多市郎	眞中安松	宮本熊彦	中谷寅太郎	尾田常太郎	小野六松	奥村彌五市	折茂吉太郎	尾田善一郎	東卯之助	瀧川幾太郎	瀧川幾太郎	尾田善一郎
------	-------	-------	-------	-------	------	-------	-------	------	------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	------	------	-------	-------	------	-------	-------	-------	------	-------	-------	-------

新澤次太郎	大島賢次郎	稻葉源吉	丸本重太郎	津田信次	阿久利一郎	村上登一郎	村上登一郎	梶岡音吉	梶岡八藏	桑原末吉	弓削善四郎	諸藤子之吉	山崎霽見	山崎霽見	古川儀一	芳野彦十郎	芳野喜太郎	關根畝耕	野田徳次郎	岩田才太郎	末永勇吉	清野市之助	末永勇吉							
-------	-------	------	-------	------	-------	-------	-------	------	------	------	-------	-------	------	------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------

小山正次	川崎卯八	吉畑九之助	福田幸太郎	古山サトエ	宮嶋清太郎	辻良平	中川彌平	品川角次	住田吾平	赤司徳太郎	赤司早苗																			
------	------	-------	-------	-------	-------	-----	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	------

JAPANESE HOTEL ASSOCIATION

恭賀新年

桑港旅館組合

新年

事務所 東汽建築内

549 Market St., San Francisco, Calif.



謹賀新年

藤本商會

食料品雜貨 直輸入卸小賣部

支店主任 藤本觀 支店 安永昌 分配人 世良田重

種村權重郎

店主

丸尾房五郎 田代辨次郎 森岡耕三郎 坂田耕三郎 高橋晴三郎 麻岡請三郎 山根貞三郎 角田平三郎 藤本源三郎 藤本正藏

正白味漬 正鮭粕漬 正麩製造販賣部

桑港ジャクソン街三三八



日米

新年限(第四)

新年に際して 在留同胞諸君に望む

日米兩國の親善には兩國民が
自ら進んで努力せねばならぬ

駐米代理大使 吉田 伊三郎

新年に際して、在留同胞諸君に望む。日米兩國の親善には、兩國民が自ら進んで努力せねばならぬ。...

新年に際して 我が在留諸君に 精神的修養を望む

大正十四年を
大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

大正十四年を

第一世 移動を慎み將來 の上に注ぐ

青木道嗣

一九二五年には
多少恢復せん

立川直三郎

松田午三郎

吉田清

竹内幸次郎

鳥山平藏

新田長市

木庭利器三

岩鶴一雄

眞壁信藏

田山敬喜

立川直三郎

門野篤子

丹正之

今村正雄

小森次郎

林彦次郎

齋藤博

諸君の意見

見學團

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

見學團 諸君の意見

同團員の意見

諸君の意見

謹賀新年



鶴田合資會社

社員一同

417 JOSEA STREET, SAN JOSE, CALIF.

醤油、味噌、糍製造元

賀正 サンノゼ市

日米支社
主任 松井壽治

新世界支社
主任 岡垣吉太郎

沖田本店

沖田支店

土橋商店
店員一同

佐市商會
電話サンノゼ二〇二五

德和號商店
佐市クリアランド街三三
電話サンノゼ三九五五

秋月益夫
萩原順
岩崎清藏

伊藤今藏
泉壽喜次
石丸政太郎

川上虎彦
久坂藤吉
野滿久吉

山口屋旅館
木船敬藏

石野寫真館
石野傳喜

九州屋旅館
堀石太平

サンノゼ學園

武田熊太郎

常盤フイツコ
マーケツト
府内軍藏

古賀謙藏
電話サンノゼ五九四八

サンノゼ旅館
渡邊繁一

南海屋旅館
宮崎勝助

助學 森本智恵

佐市佛敎會
開教師 渡邊岩雄

遠芳

中原齒科醫院
堀産院

廣東樓

石川商店
佐市ジャクソン街二四八

瓊英樓

城花園
佐市北第五街二五二

可兒熊彦

日本病院
加州公認醫務-合 敬進

喜多商店
喜多平島千助

ヂャクソングラード
田橋五郎

有田商店
有田庄平

山本久太郎

山本實夫

春山長吉

島根新藏

桑房次郎

山田輔也

澤田喜美雄

桑田光次

北澤武衛門

竹見勇吉

伊藤藤吉

北澤儀重

田上卯太郎

木村時男

早野又五郎

八木愛次郎

松尾安太郎

坂本安太郎

杉下泰助

長富米藏

矢野龜雄

吉原佐一郎

長島留次郎

古屋棟吉

宇佐美兼太郎

松下丑楠

福井常二郎

森田義千代

藤本信太郎

本川正義

吉原理光

平崎清

井上賢之助

後藤辰次

木村善太郎

甲斐政友

松藤丈作

窪山菊次郎

川原勝二郎

三留伊藏

古賀眞馬

越山辰平

内藤辰次郎

松下熊次郎

川浪寅吉

谷口衆藏

元金敬三

木村又五郎

坂口長吉

中舖繁太郎

丸林免一郎

上村市彦

西本濱一

地岡政喜

上田鶴彦

新貝富藏

村井喜代次

早川次良

坂井峰吉

森改藏

萩野惣平

田中旅館

增永竹松

大久保虎次郎

末崎瀧五郎

西田喜太郎

西田彌一

和田伍一郎

あけましてめでたう

一月一日

羅府料理屋組合

川福正一天新梅濱矢一か竹ま花さ入十丸松三大龜藤勢末

月の福の富のつ五の光す

福富亭樂松富花倉士新くは月家船夜菊しや鶴家イ廣



友岡作一	江川信正	田中弘七	桑原卯吉	吉原茂	四條浦策	中村善之助	岡本九兵衛	平田彦太郎	大藤勇	廣元良一	安田精一	基下壯太郎	吉田清	日の出商店 白石市太野	浮島亭 甲斐原 源三郎	藤谷商店 藤井平吉	日本旅館 稻葉 隆造	肥後屋 星津常喜	あさひ商店 山根信藏	大野吉五郎	坂田龜喜	宮川壽吉	櫻府河下地方 コートランド	
正賀			和洋食料品雜貨一切 橋本商店 橋本安治			山口屋旅館 松原伊三郎	古川商店 古川寅八	岡原正一	齊藤權衛門	平野萬藏	富田長平	元山徳一	徳吉熊之進	田村故平	成田匡太郎	平田力松	住井周一	星子寛次郎	山下善一	アイルトン	堀内義利	四條米作	岩岡源吉	中西兼一
中加農事會社 桑港エリス街六五〇 電話プロスタット三三八			中野商店 中野熊太郎			渡村健一	廣津友一	加州各地	秋山英藏	岡部善一	西浦藤吉	榊宮仙太郎	安永運送店	島山喜久治	司馬茂	上田久吉	追田兄弟	西本繁吉	 謹賀新禧 桑港フロント街二一四 加州海産商會 支配人 西本良祐					

恭賀新年
 アキヤンポ ベニヤード會社
 社長 中川要吉
 加州アキヤンポ ルートエー 函三三三
 電話 三七エフ一三

謹賀新年
樓亞株式會社
 加州ローダイ市郵政七二 電話八〇

謹賀新年
臺亞地方
 在住者一同

謹賀新年
犬飼商會
 桑港第五街一五三

謹賀新禧
 美術雜貨直輸入商
ドラゴン商會
 商會主 玉村新之助
 外 一同

謹賀新年
 且元月一
 美術雜貨輸出入商 **芙蓉商會**
 會主 神崎吉三 (藤原改稱)
 小林七郎 清水雄二郎
 中谷甚一 坪井經藏
 藤原千丈 大村肇子
 芝崎長和 池田政子
 柳生鶴太郎 寺澤萬壽
 神戶市三ノ宮町一丁目百六十番
 藤原兄弟國會 外店員一同

新年を賀す
 美術雜貨商
合名 岩田商會
 店員一同
 各支店員一同
 日本工場員一同

恭賀新禧
太平洋ドライ
グーズ商會
 店員一同

謹賀新禧
 美術雜貨直輸入商
ドラゴン商會
 商會主 玉村新之助
 外 一同



謹賀新年

ホーム洗染株式會社

社員一同

ワシントン街九〇九・九一

電話 カネー 三一九〇



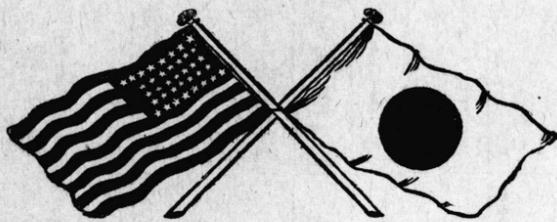
青柳茂	木島彦一郎	水取徳松	須田千力	大森勝之助	寺田儀郎	瀨尾定六	中野淺吉	長野乙作	佐藤兼藏	西岡光太	井浦洗染所	天野市助	榎本利作	樋口徳寶	森岡枝樓	岩下民次郎	弓矢竹虎	高柳銳之助	鈴木俊三	重住杏之助	青柳善守	原常助
仁田坂豊太	久島好光	田邊助一	道田彌一	栗田秀吉	佐藤友平	増田乙吉	田中小十郎	人見藤右門	笹島滋	森内庫太郎	松本豊松	笠音吉	飯田俊彦	福原角太郎	半田精一	小西正勝	小池專作	田中與平	梅窪正樹	田ノ上源右門	露木半藏	花木信吉
若江直喜	黒河鶴吉	黒河鶴吉	古木榮藏	大工業	鳥羽喜二郎	田中常助	木下莊三	塩澤喜久彌	米田定次郎	田中忠左門	金井徳太郎	吉岡彦一	後藤治一郎	大森近義	近藤宗助	山崎平作	竹歳百藏	中村松太郎	小林藤平	和田友信	橋本義人	渡邊金之助
職員一同	職員一同	前田保忠	職員一同	土橋忠治	職員一同	職員一同	職員一同	職員一同	塚本松之助	久保川廣	久保川良知	外一	職員一同	職員一同	職員一同	秀島七三郎	堀莊次郎	森小島金魚店	門田國五郎	半田定太	石井安太郎	
花園彦喜	東京洋食店	MK洋食店	シチ洋食店	小宮山成巳	柳原福太郎	篠原重藏	井上源吉	井上三吉	大谷房楠	河村吾市	高橋力	栗原節雄	羽野芳平	村瀬初代	山本素太郎	吉田洋服店	寺本洋服店	岡本裁縫所	森本竹區	森本竹區	森本竹區	

桑港料理屋組合

青柳 菊川 壽司 源亭 いろは すすみ 福多 矢車 日米飯屋 常盤園 博多屋 萬盛庵 みどり 清月

あけまして 御目出度う

新年



謹賀

一月元旦

桑港日本人食料品卸商組合 (ABC順)

中央貿易株式會社
波多江商會
石光商店
陰山商會
共同消費會社
日本商會
北米貿易株式會社
東洋貿易株式會社
太平洋貿易株式會社



應新年雜詠



森素人選

初水が流るるの風の音かな
初水が流るるの風の音かな
初水が流るるの風の音かな

功名心
必要を高調
松永庄吉

功名心の子である。血は此大なる
功名心の子である。血は此大なる
功名心の子である。血は此大なる

詰将棋に就て
鈴木生

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

功名心
必要を高調
松永庄吉

功名心の子である。血は此大なる
功名心の子である。血は此大なる
功名心の子である。血は此大なる

詰将棋に就て
鈴木生

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

懸賞詰将棋
解答

賀正 ワッソソビル 日本商會 井上亀一郎 清時利次 村上鹿藏 榎本辰太郎 櫻井俊人 山本常治 三田精一 酒瀬川清右門 小玉晋松 永瀬長介 眞鍋生造 小林織太郎 田中辰治郎 松本政次郎 岡田象吉 片山正水 美根伊勢吉 壽村武一 橋本勇穂 竹田作次郎 森本楠松 吉井泉造 海野富之助 林淺吉 土谷峰治 伊達甚二郎 田中兼助

W. W. BENDELL AUTHORIZED FORD & FORDSON DEALER ルーデンベ 車動自ドローフ 人理代 たつなく安回今 段値し渡ルピンソツワ CHARLES FORD CO. 日年二十七立創 ニューホーム洋食店 Pajano Valley National Bank Pajano Valley Savings Bank

先原郵餘	金本四賀一	仁紫彌一	落合玉一	三好盛太郎	木村京一	田中友吉	前田夏子	澄谷繁	丸木庄三郎	野田德二郎	池田貞藏	加藤魚店	川野友二郎	宮本ツル	植木照一	川田勇	大内田芳雄	小野郁世	林保太郎	林魚店	フランク・エチ・パーク會社	山田環	山手地方	手島醫院	大力房吉	中西常五郎	佐々木介一	松田増雄	篠原智成	沖勝次	津田勝一	山崎善吉	岡崎豊市	山川三郎	廣島屋商店	濱崎床屋	吉田商店	西川旅館	惠古勝平
賀正	食料品商	谷川商店	市川久一	杉山一次	日本新聞通信員	佐野裁縫所	松本保吉	市川久一	松山一次	日本新聞通信員	相原尚春	大門丈三郎	岡澤源質	宇治田彦太郎	秋重俊次	佐藤商會	平野登市	高橋愛三	金子秀雄	吉田徳助	山崎富太郎	稻益岩吉	辻原喜三郎	村田豊太郎	齋藤柳吾	里村文策	尾崎隆輔	板倉橋雄	原眞一	中元福太郎	山本多次郎	中澤勝藏	梶原又三郎	廣田爲夫					

中邑政司

栗原商會

電話ウエスト八一三〇

謹賀新年

金門公園内

日本庭園

萩原眞

萩原五郎

電話バシフイツク二六二四

吉澤商店

齊藤商店

尚工商會

主人 齊藤廣次

店主 小淵一喜

賀正

御菓子司 松屋

ボスト街一六九六

電話ウエスト五三六六

吾屋商店

中川商品館

和洋雜貨部 煙草卸部

主人 財滿孫次郎

加州ホテル

謹賀新年

中村裁縫女學校

中村鶴子

南海屋旅館

主人 福島仙藏

外 同

安藝ホテル

主人 片岡一郎

支配人 後藤繁藏

太陽貸自動車會社

朝邊庄太郎

上田本太郎

日米寫眞師組合

組合員一同

五車堂

桑港ボスト街一六九八

歸國中に付き年賀飲禮

在東京 小野昇六

相澤金丸 外一同

謹賀新年

旦元月一

海陸商會

鮮魚、肉類 食料品

桑港ラグナ街一六一一

電話ウエスト四五〇五

井堀田菊 井治三 中儀一 門嶋榮助

恭賀新年

一月元旦

S.K.家具合資會社

店員一同

ゲリー街一六〇五

恭賀新年

桑港ボスト街一七四七

鮮魚、肉類、食料品

かまぼこ製造

桑港魚市場

道楠星岡村 前野島井喜一 久信行 雄守一雄郎

謹賀新年

桑港ボスト街一六〇五

鮮魚、肉類、食料品

かまぼこ製造

桑港魚市場

道楠星岡村 前野島井喜一 久信行 雄守一雄郎

謹賀新年

旦元月一

海陸商會

鮮魚、肉類 食料品

桑港ラグナ街一六一一

電話ウエスト四五〇五

井堀田菊 井治三 中儀一 門嶋榮助

謹賀新年

旦元月一

海陸商會

鮮魚、肉類 食料品

桑港ラグナ街一六一一

電話ウエスト四五〇五

井堀田菊 井治三 中儀一 門嶋榮助



血 關

健 一

良雄は、彼の男に初めは、... (Main text of the 'Blood Circulation' advertisement, discussing health and vitality.)



粧化初 題五年新

新年小説 選後に 一言を附記す 土田三太郎

新年小説の選後に一言を附記す。土田三太郎氏の作品について、その特色と意義を論じている。

- List of names and addresses: 安田儀哲, 世良真一, 飯田和次郎, 唐崎豊, 石田三郎, 田中一男, 松尾音吉, 藤浦基, 清水友吉, 瑞穂商會, 猪野哲雄, 藤井半次郎, 内山正雄, 吉田喜代松, 有馬寫眞館, 本田花店, 持木印刷所, かんはん, 村上イワ, 谷大五郎.

恭賀新年 一月元旦 吾妻洋食店. Advertisement for My Wife Western Restaurant, located at Grier Street 1534, White River 7.

謹賀新年 本年も相變らず 矢野定夫. Advertisement for Yano Daido, located at Grier Street 2533, Flower Moon Hall, and Post Office 1670, Spring Moon Hall, and Post Office 1603, Watanabe's Store.

謹賀新年 舊年中は多大の御愛顧を辱ふし難有厚く御禮申上候. Advertisement for Nishikawa Kaishundo Co., located at 1206 3rd St., Sacramento, Calif.

日米薬種、書籍、美術品並化粧品. Advertisement for Nishikawa Kaishundo Co., featuring various goods and services.

賀正

灣東地方 名刺交換

辻寫眞館	中本庄太郎	上原久雄	犬飼 猛	内海牧治	猪野香留	兩宮 要	加藤鈴之助	清水久男	二階堂商店	伊藤 傳	元持善四郎	叶伊太郎	北垣末松	武井延秋	木村裁縫所	後藤裁縫學校	鹽澤徹四郎	山下喜四郎	重富寫眞館	森田卓立	木村興信	犬飼よし子	林 幸茂	矢幡富藏	波多泰巖	水野琢成	廣田善朗	有馬 甫
灘岡健作	小山榮永	西村直	高繁喜	北村嘉久藏	永井宇兵衛	富士湯	大村信次	霜鳥新一郎	秋谷定太郎	佐々木床	美州 樓	大和商會	岡 寶平	古川實夫	東洋ホテル	太平洋印刷所	田中商店	佐野商店	松山久雄	畔取役楠	三宅福次	中重榮藏	荒川松吉	山下金吾	今給黎女學校	府高等裁縫學院	小松嘉男里	山寺袈裟造
藤野政之助	兒野彦太郎	伊藤佐太郎	西依又七	森谷鉄次郎	和佐忠和	梅津 榮	藤野豊次郎	吉野景勝	田中岩次郎	武田産院	福田元次郎	吉池光次	南方勝三郎	西垣壽太郎	上原尚秀	武藤時計店	根石貞一	竹内彌一郎	西 伍八	上原喜久藏	南島床	外岡床	森切花店	館後音吉	伊藤兵藏	登 教一	菊水旅館	藤井球場

堀田産院

松岡文治

是松角三郎

中島菊太郎

サンセツト 洗濯所

賀正

飲料一切

丸山商店

丸山惣次郎

謹賀新年

アーベントン ヒルサイド パリアフォーム

竹阪嘉六 市阪彌作
關ヶ濱孫市 平林賢一
富田直之進 塚川喜太郎
黒土善一 三隅福次郎
前河土伍平 大磯豊吉
後呂善二郎 今川梅太郎
石田清一郎 市川藤四郎
土居寛六 熊谷梅吉

謹賀新年

ニユーアール
アデン製鹽會社
日本人部主任
杉本林藏

加藤泰次郎
森友清孝
中村孝作
關ヶ濱萬藏
竹下金倉
池田新太郎
小木松太郎

謹賀新年

クリクサイド ガーデン
永井多五郎
永井憲明
普傳名喜一
武田忠夫

加味順一
藤井隆太郎
末安虎吉
腹巻三郎
王川 涉
岩谷綱次
世良一貫

賀正

丸山商店
電話一七四一

波多野商會
山崎産院

渡邊金吉
池田貫道

賀正

丸山商店
電話一七四一

丸山惣次郎

丸山商店

丸山惣次郎

丸山商店
電話一七四一

丸山商店

丸山惣次郎

賀正

ハカビル地方

中井藤治郎	上達萬太郎	野島佐次郎	野口榮次郎	山田光三	山中茂一	松本欽一	松本菊次郎	藤川龜彦	古屋泰治	小村小太郎	小畑鐵五郎	寺下豊吉	木本吉藏	スースン	堤本善之助	追本欽次	津川麻一	中村佐膳	内本善之助	太田弘太郎	山畑信次郎	岸喜一郎	南方利元	小島忠郷	鈴木永治	鈴木周五郎	澤崎藤之助	門脇武雄	ウインタース	土手兄弟
江崎佐太郎	紀和床	湯淺岩楠	同誠一	見田金城	増田木平	同勇吉	南出盤雄	平開教師	東佐二郎	守谷峻	井上憲作	池上利助	井内留之助	井中佐一	林徳太郎	星崎光藏	南谷菊松	門脇岩千代	吉原久一	辻本兵三郎	中村竹楠	中村譽志夫	中本安太郎	中村竹楠	中本安太郎	中本安太郎	中本安太郎	中本安太郎	中本安太郎	中本安太郎
蓬萊商店	瀨田旅館	和歌松旅館	山本眞次郎	高橋岩楠	畑中久吉	西田欽次郎	濱本清次郎	西川丈八	谷床屋	川本君一郎	岩永直人	見襄穂作	保井兄弟	中川健藏	西村健次郎	中垣酒獄	藤井正男	加味静一	清井篤之助	水間作之丞	山本安一	山本安一	山本安一	山本安一	山本安一	山本安一	山本安一	山本安一	山本安一	

恭賀新年

蓬萊商店

店員一同

謹賀新年

株式公債賣買業
創立一九一二年
營業十四ケ年間

▲大正十四年は

金儲の大機會

皆様の御愛顧御引立に依り弊社創立以來十四年、年増しに發展仕候段難有奉深謝候
扱今年は米國は大統領の撰舉も相濟み一般事業界安定となり、日本は震災の復興事業大いに進捗財界は追々順調に相向ひ候に付兩國共株式界には今年一大飛躍可有之、従つて大相場を現出する事一般期待致し居候に付此機會を逸せざる様切に奉希望候

L. A. OFFICE
117 1/2 Weller St.
Los Angeles, Calif.
(Phone Tucker 2373)

HAKUSHIN SHA
416-419 Pacific Bldg.
Market & 4th Sts.
San Francisco Calif.
(Phone Douglas 3284)

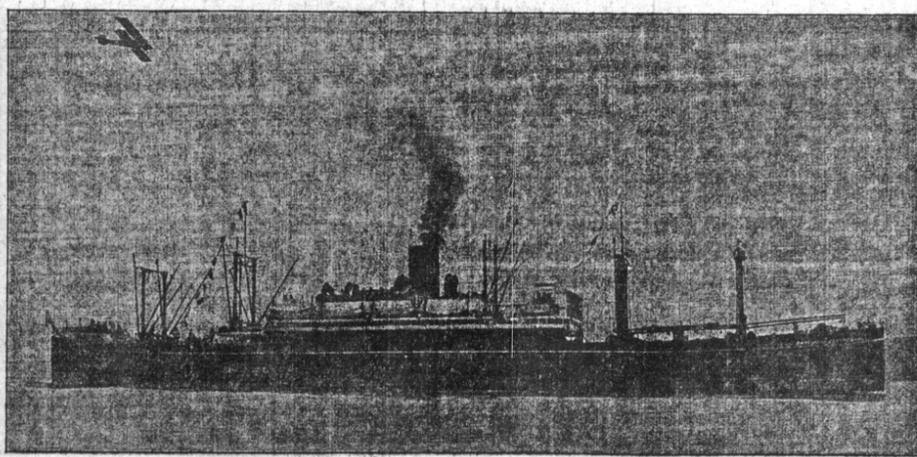
博信社

羅府出張所
電話 タラソニ 三三七三

加州東亞線一太平洋郵船會社

米國船船局代理

ホノルル經由
橫濱及神戸行



ホノルル經由
橫濱及神戸行

CALIFORNIA ORIENT LINE

OPERATED FOR
U. S. Shipping Board
By Pacific Mail S. S. Co.

508 California St., San Francisco, Calif.

503 S. Spring St., Los Angeles, Calif.
10 Hanover Square, New York City.

日本人部
仲海藏

新造快走船五艘
各貳萬壹千トシ

桑港出帆日

クリヴランド	一月十日
ビヤス	一月廿四日
タフト	二月七日
ウイリスン	二月廿一日
リンカーン	三月七日

乗組員

クリヴランド	大木高
タフト	猪名川
ビヤス	花岡
ウイリスン	渡邊
リンカーン	高橋
シ乗組員	野間